

地域活性化の思いと景観マネジメントについて－徳島県かずら橋駐車場のケーススタディ－*

The Conflict between a Desire for the Activation of Local Area and a Landscape Management*

真田純子**

By Junko SANADA**

1. はじめに

現在、多くの中山間地ではまちの衰退が問題とされ、地域を活性化するための様々な事業が行われている。徳島県内において、2006年、秘境の雰囲気が魅力となり徳島県内有数の観光地となっているかずら橋付近に、巨大な駐車場が建設された。主たる建設理由は、紅葉シーズンなどの渋滞解消である。かずら橋は、徳島県の山間部において県外からの観光客を呼ぶことのできる貴重な観光地のひとつである。駐車場の建設は、衰退の一途をたどる中山間地において、観光需要を最大限受け止めたいとの思いから生まれた事業である。しかしながら、谷に幾本ものコンクリートの柱を立て建設した駐車場は、秘境の雰囲気を損ねていると、建設当初から批判の声が寄せられている。このように、地域活性化への思いが、結果的に景観を損ねることは全国に見られる問題である。

こうした事業を批判することは簡単である。しかしながら、多くの疲弊した地域が、地域の活性化に望みをかけてソフト施策だけでなくハード整備も行いたいという思いを持っているということは、現実である。無責任に批判するのではなく、こうした地域活性化への思いが、なぜ、結果的に景観を損ねる事業となって形に表れてしまうのかを、検証してみる必要がある。

そこで、本研究ではかずら橋駐車場建設の経緯を調査し、こうした状況の背景にある地方行政や住民の思いなどの構造的な問題を明らかにすることを目的とする。

2. かずら橋駐車場の概要

(1) かずら橋駐車場の位置と形状

かずら橋駐車場は、2006年に総工費43億円をかけて西祖谷村が完成させた駐車場で、かずら橋のかかる祖谷川沿いにあり、かずら橋から250mほど下流に位置している(図-1)。駐車場は2層で普通車およびバスが300

*キーワード：景観、観光

**正員、博士(工学)、

徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部

(徳島県徳島市南常三島町2-1、

TEL088-656-7578、FAX088-656-7579)

台収容できる大きさで、そこにイベント広場と土産物を売る物産館が併設されている。谷に張り出す駐車場や広場を数十本のコンクリートの柱で支えているような構造である。谷が急峻なため、コンクリートの柱は30m程にもなっている(写真-1)。

駐車場の対岸には、集落や駐車場建設以前から長く営業してきた土産物屋や飲食店がある。また少し開けていることもあって、対岸からかずら橋駐車場やコンクリートの柱が林立する様子がよく見える状況である。

かずら橋から下流に河道が大きく右に曲がり、左岸に駐車場があるため、かずら橋からも見える位置にある。

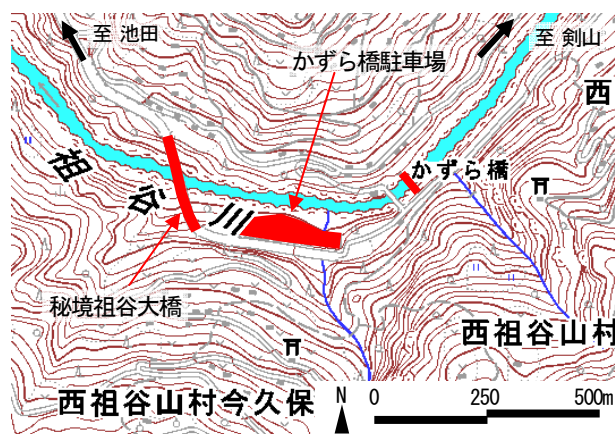


図-1 かずら橋・かずら橋駐車場とその周辺地形



写真-1 対岸からのかずら橋駐車場全景

(2) かずら橋駐車場の建設経緯

かずら橋は、県外から訪れる観光客が多い県内でも有数の観光地である。新緑や紅葉のシーズンには周辺の道路が渋滞し、観光客だけでなくこの地域に住む人々の生活にも影響が出るほどであった。渋滞の原因は、道の細

だけでなく、駐車場の少なさにもあった。谷沿いに建つ各土産物屋や飲食店が、それぞれ数台～十数台の駐車場を持っていたが、それでは観光シーズンの需要には対応しきれていなかったのである。

1998年の明石海峡大橋開通、1999年の徳島自動車道の井川池田ICまでの延伸を見据えて、より多くの観光客を誘致するため、快適に観光できるよう施設を整えようと、1990年代後半から、かずら橋周辺に様々な観光施設を建設し始めた。ふるさと創生資金で掘り当てていた冷泉を活用した村営の温泉施設「祖谷秘境の湯保養センター」を1997年8月に完成させ、同年10月には道の駅にしいやを建設した。2000年に秘境の湯の隣に交流研修宿泊施設としてホテルを建設、翌年には別館を建設した。ホテルは9階建ての高さ約40mで、当時の新聞には「県西部では最も高い」建物になる、と記されている¹⁾。

また、1998年に県道・山城東祖谷線の秘境祖谷大橋の建設に着手している。

この段階でかずら橋駐車場の建設は決定していなかったが、構想としては存在していた。かずら橋駐車場の建設を争点とした村長選が1999年に行われ、計画推進を掲げる候補が勝利した。ここで事実上、駐車場の建設が決定した。翌年から用地買収・設計が始まり、2001年に着工した。途中、住民の地元反対などもあり、工事が一時中断したりしたが、秘境祖谷大橋とかずら橋駐車場は2006年2月に竣工した。3月1日に西祖谷村は周辺5町村と合併し三好市となった。駐車場は4月に三好市営駐車場として営業を開始した（現在は指定管理となっている）。

しかしながら、建設中から景観を損ねるとの批判があり、2007年5月に三好市は、コンクリートの柱を植物で「カムフラージュ」することの検討開始を決定した。

表一 1 かずら橋駐車場建設の経緯と関連する出来事

年月	出来事
1997. 8	村営の温泉施設「祖谷秘境の湯」完成
1997. 10	道の駅にしいや 完成
1998. 4	明石海峡大橋 開通
1998	秘境祖谷大橋（県道・山城東祖谷線）着工
1999. 3	徳島自動車道が井川池田ICまで西に延伸
1999. 4	西祖谷村長選（駐車場建設が事実上決定）
2000	かずら橋駐車場建設のための用地買収・設計
2000. 5	温泉の隣にホテル「祖谷温泉秘境の湯」建設
2001	かずら橋駐車場 着工
2001. 12	ホテル「祖谷温泉秘境の湯」の別館 建設
2006. 2	秘境祖谷大橋、かずら橋駐車場 竣工
2006. 3	西祖谷村、周辺5町村と合併、三好市に
2006. 4	市営駐車場として営業開始
2007. 5	柱を植物で隠すことを検討することを決定

3. 検討過程における問題点

建設の経緯と三好市役所産業観光課へのヒアリング、当時の新聞記事をもとに、検討過程における問題点と思われることをまとめた。



図一 2 かずら橋と高速道路の関係

(1) 不十分な検討

かずら橋の駐車場を始めて見た人には、「作る前に予想できなかったのか」という感想を持つ人も少なくないであろう。事前の検討については、小規模な山村特有の構造的な仕組みと、発注方式、複数の自治体による事業の実施が原因として考えられた。

a) 小規模な自治体であること

2章でも示したように、かずら橋の駐車場は、1999年の村長選の直後に建設が決定している。村長選は、1999年4月20日に告示、25日に投票が行われた。前村長は2月に死去していたため、いずれも新人（村役場職員）の2人が立候補した。

これらの候補は、かずら橋を中心とした観光開発に積極的なN氏と、観光開発を慎重に進める考えを持つM氏であった。両者の主張は表一2の通りである。公共事業を積極的に進めようとするN氏に対し、PR事業などソフト事業で観光の活性化を図ることや、「村の特徴を生かした空間整備と、自然に配慮した観光地整備」など、M氏の言葉からは、観光地開発を巡って両者が対立していることがよく分かる²⁾。

選挙の結果、前村長の地盤を引き継いだN氏が勝った。ただ、当初はN氏圧倒的に有利であると思われていたが、N氏886票、M氏734票の得票で、地元紙徳島新聞には「村を二分した戦い」であったと書かれている³⁾。

ここで、自治体の規模が非常に重要な鍵になっているとヒアリングでは分かった。小規模の自治体では、トップを決定した場合、トップが公約に掲げたことは、事実上、決定したことと見なされる雰囲気があるということであった。実際、当該選挙での選挙人名簿の登録者数は1651人、投票率は98.35%であった⁴⁾。駐車場の建設をめぐる直接投票のような状態で、公共事業の拡充を掲げるN氏が選挙に勝ったことで、村ではかずら橋駐車場の建設が事実上決定したと考えられたということである。

ここで、かずら橋駐車場の検討に話を戻すと、地方の小規模自治体の選挙戦であるということ、1週間にも満たない選挙期間であるということ、かずら橋駐車場の

予想図などが示されて選挙が行われたわけではなく、「駐車場を建設します」という言葉のみによって計画が決定したのである。さらに、徳島新聞によると、「地縁血縁のからみで大半の票が決まる⁵⁾」とあり、公約の内容で判断されているとも言えない状況である。

以上のように、選挙戦での「言葉」によって建設が事実上決定した。事業にあたっては住民説明会も開かれたが、「駐車場の建設はされるもの」との雰囲気があったために、十分な説明はされなかったということである。

選挙では票が二分していたことから分かるように、反対の住民がいなかったわけではなかったが、反対派の住民は景観ではなく、用地買収の価格が不当に高いことを論点にしていた。2000年に行われた用地買収に対し、2001年4月に、反対派の住民が「村長が不当に高額で駐車場用地を買収し、村に損害を与えた」として住民監査請求を起したが6月に棄却されたため、7月に損害賠償請求をおこした。2003年に徳島地裁は村長に6200万円の支払いを命じる判決を出したが、2004年に高松高裁は、用地買収額は不当とは言えないとの判決を出したという経緯がある。

表－2 村長選における各候補の公約²⁾

候補者	公約内容
N氏	<ul style="list-style-type: none"> ・ かずら橋周辺の道路や駐車場の整備など公共事業の拡充に努力する ・ 祖谷秘境の湯や現在（当時一筆者註）建設中の宿泊施設の安定経営に全力を注ぐ その他、青少年の健全育成、少子化対策等
M氏	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特産品の開発や販売経路の開拓を行い、村のPRに力を注ぐ ・ 祖谷秘境の湯に建設中のホテル運営計画を十分に協議検討する ・ 村の特徴を生かした空間整備と、自然に配慮した観光地整備を行う その他、高齢者福祉等

b) 発注方式

設計に先だって、事前に景観検討業務などは発注されなかった。設計の業者選定にあたっては、入札方式が用いられ、設計にあたって専門家等による景観検討委員会も設置されなかった。なお、他の事業においてもプロポーザル方式自体が浸透していないとのことであった。

c) 複数の自治体による事業

前述したように、かずら橋駐車場建設の構想は、村長選以前によりかずら橋駐車場の建設が決定する前に、構想としてはあがっていた。また、駐車場の建設決定以前の1998年に秘境祖谷大橋が着工している。秘境祖谷大橋は、祖谷川の右岸をとる県道・山城東祖谷線のバイパス整備の一部で、秘境祖谷大橋をはさんで、かずら橋の付近のみ左岸を通る。秘境祖谷大橋は、事実上、かずら橋駐車場へのアクセス道路となっている。ヒアリングにおいて、「橋の建設が始まっていたために、駐車場の

建設は当然のもののように思えた」との話があった。

徳島県による県道整備の検討経緯について詳細は分からないが、県が先に駐車場へのアクセス道路の建設を開始したことが、結果的に当該地への駐車場建設を後押ししたと考えられる。

(2) 観光資源の見誤り

「かずら橋」という強力な集客力を持つ観光資源があるために、観光資源を見誤っていたことが、ヒアリングより推測された。

駐車場が出来ることによって秘境の雰囲気がなくなったとの意見があるため、これについてどのように考えていたかヒアリングしたところ、「振り返ってみれば、かずら橋、ということにしか意識が行ってなかった可能性もある」との意見を得た。西祖谷村では「秘境」を売りにしており、観光客もその雰囲気を楽しみに来ている人も多いことが推測されるが、かずら橋という観光の中心となる「モノ」があるために、かずら橋のみが集客しているような意識になっていたとのことである。こうした意識が「かずら橋を訪れる観光客」の受け皿として駐車場や高層ホテルの建設につながっていると考えられる。

また、かずら橋周辺には2008年まで観光ガイドもいなかったということである。観光ガイドはその地域を紹介し楽しんでもらいたいという活動の一つであると考えられるが、観光ガイドがいなかったという事実も、強力な集客力を持つかずら橋の存在そのものに頼ってきたことの現れであると言える。また同時に、観光客が何を求めて訪れているのかを知る手段をひとつ失っていたともいえる。

4. まとめ

以上、かずら橋駐車場の検討経緯を詳細に見た。その結果、以下の2点が明らかとなった。

- ①選挙により事実上計画が決定することや、関連事業が上位の自治体で行われた場合に、村の意向を反映する余地がなくなることなど、小規模な自治体であるがゆえに“計画決定”において十分な検討を行えないような構造的な問題があること。
- ②強力な集客力をもつ観光資源がある場合に、それに頼ってしまい、観光資源を見誤る可能性があること。

参考文献

- 1) 朝日新聞社：「朝日新聞 徳島版」1998年12月11日
- 2) 徳島新聞社：「徳島新聞」1999年4月21日
- 3) 徳島新聞社：「徳島新聞」1999年4月26日
- 4) 徳島新聞社：「徳島新聞」1999年4月26日
- 5) 徳島新聞社：「徳島新聞」1999年4月24日